
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 389 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2016.06.16（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

*****発行部数 987 部*****

□ 目 次 □-----

<巻頭言> “ふるさと”のことを学ぶ 塩谷哲夫

<お知らせ 1> 山崎農業研究所所報『耕 No.138』発行されました

<お知らせ 2> 山崎農研編「平成のマドンナ」シリーズ No.8 完成しました

<編集後記> 言葉の力

“ふるさと”のことを学ぶ

日本の子供たちは、小学校の 3~4 年生の時、自分の住んでいるふるさについて学ぶ教科がある。そのために、どこの自治体でも教育委員会が社会科副読本を編纂している。この時に学んだことは、遠く離れたところに住んでいたり、年をとったりしても、心の隅のどこかに残っているものである。

私は郡山市立金透小学校（1872 年創立）4 年の郷土学習で「安積（あさか）疎水」のことを教わった。遠く猪苗代湖から山をくりぬいて水を運んできたことが安積平野の農業を発展させ、郡山市を中心とした地域開発の礎になったと。みんなで水路を辿って歩き、取水口や巨大なポンプを見学した。高校生（福島県立安積高校、創立 1871 年）になって、安達太良山を眺めながら疎水沿いの道を通学した。

後に、大学で農学を学ぶようになって安積開発が明治政府の国営農地開発パイロットの第一号であったことを知った。母方の先祖は、明治の秩禄処分で侍の身分を捨てて、鳥取池田藩からはるばる安積の地にやってきたのだと母から聞かされ、資料を調べたりした。安積桑野村は開拓の推進役中条正恒福島県典事の孫娘宮本百合子を書いた『貧しき人々の群れ』（1916 年）の舞台となった。

今の子供たちは、ふるさとの農業のことを教わっているのだろうかと思って、

現在の居住地の近くの農村地帯、昨年大水害のあった常総市、坂東市の教育委員会に問い合わせしてみた。常総市（旧水海道市・石下町）には鬼怒川、小貝川に沿って、私が調べただけでも地域の名称に「新田」の付く集落が 21 カ所もあった。また坂東市（旧岩井市・猿島町）には鬼怒川と利根川に囲まれた 3 千余ヘクタールに及ぶ大水田地域飯沼新田がある（江戸時代の享保 9 年〈1742 年〉以来の開発地）。

両市の副読本には飯沼新田などの農地開発のことが、地域の自然環境、人々の願いや開発の苦労などを挿話に、絵入りで良く書かれていた。みんなでお年寄りから聞き取ったり、現地を調査してマップに書いたりするようにうまく仕組みられていた。もちろん、今の農家の仕事や販売、JA のこと、そしてスーパーやお店、工場や行政のことも載っている。

子供のころ、学校の行き帰りや日常の生活の中で、肌で感じた郷土のこと、それらの姿、ざわめきや臭い。学校、公園、田んぼや畑、桜や銀杏等の木々や道野辺の草々、小川、神社の祭り、買い物をしたお店、家族揃って囲んだ夕食のテーブル...これらの事々以上に故郷の思いがしみ込んだものはない。そして結局はそれらにかかわる思いが人びとのふるさとや農・食、文化を支えることになるのではないかと思う。だから、日々の家庭や学校での暮らし、小学校 3～4 年の郷土学習・社会科副読本はすごく大事だ。そんな思いで、わが住いの周りの地域をめぐり、副読本を読み返した。

私達は一日も早く、世界のお金（金融資本）の流れに翻弄されて、先の見えない経済成長神話（グローバリズム、TPP、アベノミクス）から抜け出して、世界と日本の多様な地域の環境・生産・文化のストックにしっかり足を下したローカルの再生を考えて行動すべきではないかと思う。

塩谷哲夫

山崎農業研究所所幹事・東京農工大学名誉教授

塩谷哲夫

会員・東京農工大学名誉教授

yamazaki@yamazaki-i.org

<お知らせ 1> 山崎農業研究所所報『耕 No.138』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.138』が発行されました。

ご希望の方には雑誌を頒布いたします。

yamazaki@yamazaki-i.org

までご連絡ください。

《土と太陽と》(巻頭言)

放射性セシウムの土壌中の挙動と流域水系における動態◎塩沢 昌

[第 153 回定例研究会]

実践に学ぶ「土づくり」の思想——国際土壌年にあたって

健康な暮らしは健全な土壌から◎小泉浩郎

I 高松さんの「土づくり」の思想◎塩谷哲夫

II 私の「土づくり」半世紀◎高松 求

III 高松さんに学ぶ土づくり

——緑肥の利用と耕耘体系について◎小松崎将一

IV 土壌生成メカニズムからの土づくり◎高味充日児

V 植物も少し厳しい環境だとよく育つ？

——微生物のはたらきから考える◎成澤才彦

[特別寄稿] 3.11 から 5 年 いま必要な養生法とは◎今村光臣

[現地レポート] 「NPO 法人きらら女川」を訪ねて

——震災を乗り越えて障害者福祉に取り組む◎渡邊 博

〈連載〉“生きもの語り”の世界から⑨ 生きものの死を見つめる／宇根 豊

〈農村定点観測〉

「えすぺり＝希望」を込めて／福島県□大河原 海

里山整備から思う持続可能な農業／新潟県□吉原勝廣

<お知らせ 2> 山崎農研編「平成のマドンナ」シリーズ No.8 完成しました

山崎農研編集「平成のマドンナ」シリーズ No.8(B5版・30ページ)が完成しました。既発行分も含め、電子版あるいは冊子で頒布しています。送料込み500円です。ご希望の方は yamazaki@yamazaki-i.org までご連絡ください。

(新刊)

No.8 家族経営協定でいきいき人生にトライ

栃木県那須塩原市

酪農・教育ファーム・レストラン 人見みみ子さん

(阿久津加居聞き書き)

(既刊)

No.1 都市近郊に「オアシス牧場」を

埼玉県上尾市 榎本美津子さん (小井川敏子聞き書き)

No.2 世羅高原のそよ風になりたい

広島県世羅町 井上幸枝さん (後由美子聞き書き)

No.3 むらにまちにこどもたちにふるさとの味を伝えたい

鳥取県鳥取市 西山徳枝さん (小泉浩郎聞き書き)

No.4 働きやすい作業環境の改善

徳島県 藍住地区のお母さん達 (小林徳子聞き書き)

No.5 「奥久慈の味」から広がる出会い

茨城県大子町 齊藤キヌ子さん (臼井雅子聞き書き)

No.6 デパートに進出した農村女性

栃木県宇都宮市 アグリランドシティショップ (阿久津加居聞き書き)

No.7 貧しさに学びこころ豊かに生きる

群馬県嬬恋村 丸山みち子 (丸山みち子著)

No.8 家族経営協定でいきいき人生にトライ

栃木県那須塩原市 人見みみ子さん (阿久津加居聞き書き)

<編集後記> 言葉の力

しばらく積ん読状態にあった浜田マハさんの『本日は、お日柄もよく』(徳間文庫、2013年)を手にとった。OLの二ノ宮こと葉は、幼なじみの結婚披露宴で伝説のスピーチライター久遠久美の祝辞に魅せられ弟子入りする。そして政権交代を目指す野党のスピーチライターに抜擢され.....

文中、オバマ上院議員の「チェンジ」云々とあったので解説を読むと、原作は2008年からの連載で、単行本発行は2010年。オバマ大統領が誕生したのは2009年1月、日本で民主党政権が生まれたのが2009年9月だから、当時の社会状況を取り込みながら書かれたようだ。

5月27日、オバマ大統領が米国大統領としてははじめて広島を訪れ、17分に及ぶスピーチを行なった。その内容については賛否両論がある。批判については「原爆投下について直接謝罪していない」「いまなお米国ですすんでいる軍拡、軍事行動についてふれていない」などがその代表だろうか。とともに、この演説、スピーチライターが存在も指摘されていて、そのことをもって批判する声も少なくない。

大統領のスピーチを聞いてわたしが印象的だったのは、彼が「たぶん」ずっと長い間思考し続けてきたことを、「たぶん」自分の言葉と論理で語ったことだ。「たぶん」などというのは、スピーチライターが存在云々があるからなのだが、それでも、聞く者を惹きつけるものがあつたことは否定しがたい。

「71年前の明るく晴れ渡った朝、空から死神が舞い降り、世界は一変しました。閃光と炎の壁がこの街を破壊し、人類が自らを破滅に導く手段を手にしたことがはっきりと示されたのです」。これは、オバマ大統領がなぜ核兵器の廃絶を主張するのかの根拠だろう。

「朝起きてすぐの子供達の笑顔、愛する人とのキッチンテーブルを挟んだ優しい触れ合い、両親からの優しい抱擁、そういった素晴らしい瞬間が71年前のこの場所にもあつたのだということを考えることができます」。こちらは、一般市民の殺戮はきわめて犯罪的であるということの別の謂いであるだろう。

もちろんこのスピーチで述べられた内容は、すぐさま、オバマ大統領自身、ひいては米国自身にはね返ってくる。そのことを全面的であつたかどうかは別にして、意識したうえでの発言と思いたい。

『本日は、お日柄もよく』は帯に“何度も泣きました！”とあつて、ウソでしょ？ と思いながら読み始めた。ウソではなくホントだった。ストーリーは波乱万丈、そしてハッピーエンド。読後感を一言でいえば、言葉の力は強いな、である。

広島でのオバマ大統領のスピーチについてスピーチライター云々というのであれば、安倍首相にもいてもおかしくない（と思う）。なのに安倍首相のスピーチで記憶に残っているのは「日米同盟堅持」その一点だけである。

スピーチライターの仕事の鍵は依頼人の思考と論理をどれだけ引き出せるかにあるらしい。とするならば、スピーチの質を最終的に決めるのはやはりそれを語る人の資質と言えないか。

2016年6月16日

山崎農業研究所会員・田口 均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売

『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

（発売：2008/11 定価：1,575円）

http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/

たくさんの方の書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）

グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん（大地を守る会）

ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん（拓殖大学政経学部）

ブログ：代替案 書評：『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）

ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」

<http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive>

◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rircl.jp/shiryo.htm>

◎日本農業新聞／書評

(2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優)

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎小谷敏さん (大妻女子大学)

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ (2009/01/31)

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん ((株) 共に生きるために)

月刊とちぎV ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

(画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい)

◎塩見直紀さん (半農半X 研究所、執筆者)

ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！

立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
- 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回 390 号の締め切りは 06 月 27 日、発行は 06 月 30 日の予定です。

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 389 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2016.06.16（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

***** ここまで『電子耕』 *****